



# 館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 5 月 28 日(火)

発行 館長 加藤 智 一

## いったいどこまですごい「チャット GPT」

5 月 26 日付の朝日新聞。驚きの事実 1。スパコン界のノーベル賞といわれるゴードン・ベル賞特別賞を得た飛沫研究をチャット GPT は自力でほぼ再現。「科学を理解し、スパコンにできることも理解している。」驚きの事実 2。アメリカマイクロソフトは今年 1 月、AI を使って新しい電池の素材となる物質を発見。3200 万種類の材料の中から 18 種類を選ぶのに、従来であれば数年かかった研究を 80 時間で終了。驚きの事実 3。アメリカと香港を拠点とする企業インシリコ・メディシンは昨年 6 月、生成 AI を使って新薬候補を開発。難病患者に投与する臨床試験を開始した。コストは 10 分の 1。期間は 3 分の 1。

こんな結果を見せられたら、これから人類はどんな未来へ向かっていくのか、想像できません。完成までの道のりが短いということは、逆に言えば、出来ないこともあつという間にわかってしまうということ、あきらめるのも早い時代が来るのかな。競馬や競輪の予想に利用しようとする者は、必ず現れまよね。その場合どうなの。賭け事として成り立つの？人間が月に初めて立ったのは、1969 年 7 月 20 日、アメリカ合衆国のアポロ 11 号計画において、船長ニール・アームストロングと月着陸船操縦士バズ・オルドリンによるものでした。その後、米国が着陸計画を終了したのは 1972 年 12 月。それまでに月に到達したのは合計 12 人。いずれも米国宇宙飛行士です。あれから 52 年。だれも月にいていません。今では本当に行ったのか？とまで言われる始末。もしあの当時こんな便利なツールがあったら、今頃「月」移住計画なんてのも実現していたのかな。事実、私が小学生の時は、当然そうなると思っていたし、そんな未来予想画を描いていた。

館長だより第 19 号で取り上げた、磯田道史先生の言葉「歴史は繰り返さないが韻を踏む。」正しい（何をもって正しいとするかは問題ですが）史実を AI が学習してくれれば、きっと生成 AI が私たちに見せてくれる未来は、戦争の無い未来。というより、戦争をできなくする方法を生成 AI に導いてもらいたいです。そのためには、人間自身が、正直でなければならぬということになるのでは？

経験の蓄積と解析は AI に任せて、新しい発想、アイデアこそが何よりも重視される時代が来るので

はないでしょうか（勝手な思い込みですが）。もし、純粋な発想をもっている小中学生が生成 AI を使いこなせたら、新しいビジネス手法や様々な環境問題の解決、少子高齢化対策など、結構すごいアイデア期待できるのではないのでしょうか。

## 今日のテレ活

5/26（日）さくらんぼテレビ「ロザンのクイズの神様」

想いをつつむ、いつまでも  
NEW クレラップ



製造から 60 年以上作り続けている製品。1960 年に世に出た商品。クレラップ。作った

のは、(株)クレハです。もともとクレハでは、肥料や殺虫剤を作られていたとか。その際に余った塩素の処分に考えたのが始まりだとか。だから私思うに、クレラップは始め、塩化ビニルか塩化ビニリデンのポリマーから始まったのだと思います。これがなぜ食品用ラップにつながったのかというと、サンドイッチ用の生野菜の保護袋がヒントとなったとか。

この素材は酸素を通さないため、ニオイ移りを防ぐのが特長です。また、熱に強いので電子レンジでの加熱や冷凍保存にも向いています。始めは全く売れなかったそうですが、冷蔵庫の普及によって、爆発的に売れ出したそうです。しかし、時が流れて、1980 年代からダイオキシン問題が認識されるようになり（ここからしばらくは、私の勝手な付けたし）、90 年代に入り関連報道が急増。当時は「人類が作った史上最強の毒物」と恐れられたダイオキシン。「ダイオキシン対策推進基本指針」（1999 年）や「ダイオキシン類対策特別措置法」（1999 年）により緊急対策が進められ、塩素を含むポリマーの焼却は当然問題視されたでしょう。大変な時代があったのだと想像に難い。そんなこんなで、物質的にも改良が行われたのだと想像しますが、今も、ニュークレラップという名前で製造販売がつづけられています。これだけかと思ったら、担当者曰く、発売以来 170 か所以上のリニューアルが行われていたのだそうです。すごい。館長だより第 29 号で取り上げた「経験を活かして未来へつなげる」話の続きになってしまいましたが、一見同じに見える商品でも、常に改善の努力を怠らず、変化に対応する姿勢こそが大事なのだということに改めて感じたいです。